法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

盛り場・巣鴨に集まる高齢女性の「場所の経験」

原田, 智子 / HARADA, Tomoko

(出版者 / Publisher)
法政大学地理学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政地理 / JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY
(巻 / Volume)
35
(開始ページ / Start Page)
37
(終了ページ / End Page)
48
(発行年 / Year)
2003-03-24
(URL)
https://doi.org/10.15002/00025913

〔法政地理
J. Geogr. Soc. Hosei Univ.
35, p 37－48 (2003, 3)〕

盛り場・巣鴨に集まる高齢女性の「場所の経験」

原田智子

本稿では人文主義地理学における場所概念を援用し，都市においてある特定の集団が集まる場所を取り上げ，その集団の「場所の経験」を記述・分析することから「人の集まる場所」の原理の一端を探ることを目的とする．調査対象として高齢女性が集まることで知られている大都市東京の盛り場の一つである巣鴨を取り上げた．また調査方法として盛り場での聞き取り，参与観察を行った．結果，以下の点が明らかとなった．①とげぬき地蔵尊の御利益を受けること，盛り場での人々の触れ合いや自分自身の身の上話を「語り合う」ことといった経験を積み重ねることで，高齢女性は巣鴨という場所への愛着を強めている．②高齢女性が巣鴨へと足を向けるのは彼女らの場所への愛着だけに起因するのではなく，東京という都市空間において高齢女性の娯楽の場が限定されていることに規定されている．

キーワード：高齢女性，「場所の経験」，人文主義地理学，巣鴨，盛り場
Key words: elderly women, "experience of place", humanistic geography, Sugamo, the amusement quarters

Ⅰ　はじめに

人は身の周りの様々な場所に選択的に自分の居場所を見出す．それは家庭であったり職場や学校であったり，普段から通い慣れた居酒屋や喫茶店かもしれない．また大都市の盛り場の中に居心地の良い空気を感じ，心の通う仲間を見つけ自分の居場所にすることもある．ではなぜ人はその場所に愛着を抱き，そこに集まるのであろうか．また，何が彼／彼女らをその場所へと向かわせるのであろうか．

それを探る手がかりとして，まずフィッシャー[1]の都市における同類結合の原理が参考になる．フィッシャーによれば，都市的環境を生きる人々は競争や結合といった選択を通じて多様な非通念的な新しいサブカルチャーを生成する．サブカルチャーを生成した類似した価値観を持った人々は，やがて都市の中に自らの独自の小世界を構築し，居場所を整備し，社会圏を発達させる．また人間の個性について論じたジンメル[2]によれば，大都市は個性化を促す場所であるという．大都市では高度に社会が分化しており，ゆえに細分化された小世界同士の社会的距離は疎遠になる．大都市の人々は人間同士の疎遠な付き合いに孤独を感じるが，一方でそれは新しい社会圏へと身を委ねる契機となり，大都市は一層人々の個性を誇示する場所となる．しかし都市的環境を生きる人々のサブカルチャーや個性は，それを発する基盤となる一定の場所をその中に確保しなくてはならない．そしてそれは人々がいかにその場所と関わり，またそこに何を見出しているのかという自らの感情に訴えかける経験の量と質が問題となる．

こうした観点をふまえた時，地理学とりわけ人文主義地理学における場所概念が想起される．人文主義地理学において場所とは，「「感じられた価値の中心」「意味の貯蔵庫」「志向性の対象」としての，主体と意味関係で結ばれた人や事物を有する特有の空間」[3]を意味する用語として理解される．ここで人文主義地理学に先鞭をつけたイーフー・トゥアン（Tuan, Yi－Fu）とエドワード・レルフ（Relph, E.）による場所概念について整理しておきたい．トゥアン[4]によれば，場所は我が家，故郷，母国などに見られるように親密さや安全性，安定性を意味している．また人間にとっての場所の意味を探るためには，感情・思考・感覚の複合作用としての人間の経験がその手

がかりとなる．つまり，ここでは主体である人間にとって心地の良い濃密な経験をした価値ある空間が場所であると捉えられる．またレルフ[5]によれば，場所とは直接経験に根ざした「生きられた世界」であり，人間が意志の対象とするその仕方から把握されるものであるという．つまり，場所に対する愛着はその場所の内側にいるか外側にいるかで異なり，またそこでいかなる経験をしたかによってその強弱は段階的に推移する．

本稿では以上のような人文主義地理学における場所概念を援用しながら，都市においてある特定の集団が集まる場所を取り上げ，その集団の「場所の経験」を記述・分析すること，そしてそこから「人の集まる場所」の原理の一端を探ることを目的とする．調査対象として高齢女性が集まることで知られている大都市東京の盛り場の一つである巣鴨を取り上げる．

巣鴨は現在，多くの高齢女性が集まることから「おばあちゃんの原宿」[6]というフレーズと共に全国的に有名な盛り場であると言える．商業界[7]によれば，巣鴨の来街者の90%以上が女性であり，うち40%が65歳以上の高齢女性により占められている．またその居住地は，巣鴨が位置する豊島区が全体の50～70%を占めており，次いで豊島区を除いた東京都が20～30%，近隣県の神奈川・千葉・埼玉が10%程度である．巣鴨ほど多くの高齢女性を集めている盛り場は他に類がなく，これまで幾多の視点から研究が行われてきた．考現学の手法を用いて川添編[8]や川添[9]では，巣鴨に集まる高齢女性の実態と盛り場の歴史的変容を明らかにした．社会学では倉沢編[10]が高齢女性，商店街，露店商とそれぞれの主体に焦点を当てその意識と行動を，経済学では竹内[11]が商店街の販売戦略と独自の商法を明らかにした．しかしこうした先行研究では，巣鴨に集まる高齢女性の内面に迫る視点に弱く，個々人の多様性は無視されがちであった．したがって，高齢女性がいかなる感情に突き動かされて巣鴨に集まるのかという本稿で明らかにしたい点に関しては解明されたとは言い難い．またこうした本稿の目的，つまり高齢女性の「場所の経験」を記述することや彼女らの主体性やその生活世界の一端を探ることは，高齢女性をめぐる問題性を浮き彫りにしようとする「高齢女性研究」[12]ともいえる分野に貢献しうる可能性があると筆者は考える．さらに本稿の視点は，盛り場で活動する人々の主体の側から都市空間を捉えようとする昨今の盛り場を対象とした地理学的研究[13]と符合する側面もある．

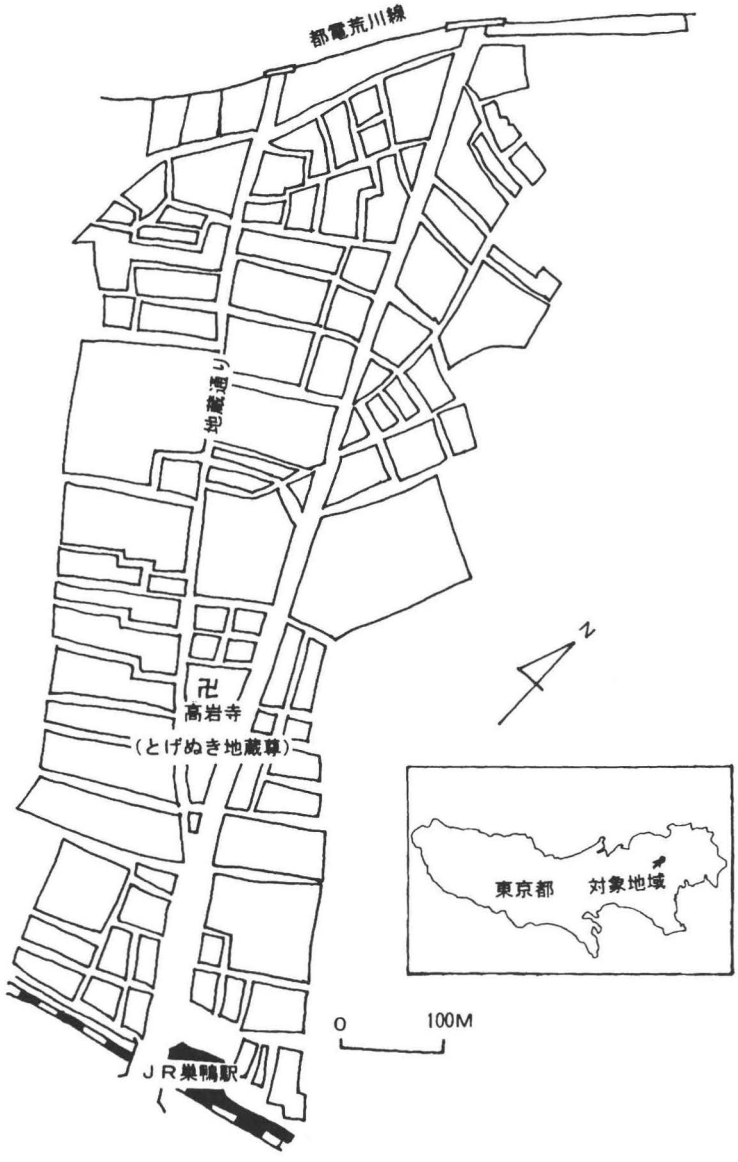
Ⅱ　対象地域と研究の方法

1．対象地域

社会学辞典によると，盛り場とは「飲食店・商店・娯楽施設などが集中し，恒常的に多数の人々が集まる都市の一地域」[14]であると定義される．現在，豊島区巣鴨にあたる行政区域において上述のような盛り場の定義に当てはまる地区は，一般的にJR巣鴨駅及び都営三田線巣鴨駅周辺地域であると考えられる[15]．しかし本稿で対象とする地域は高齢女性にとっての盛り場である．よって，高齢女性が遊び，集い，彼女らにとって「巣鴨」であると認識される範囲を本稿では「盛り場・巣鴨」として規定しなければならない．筆者の観察・聞き取り及び川添編[16]によれば，巣鴨に訪れる高齢女性の多くはとげぬき地蔵尊を中心とする寺社へ参詣し，その門前町である巣鴨地蔵通り商店街で買物をするのが一般的な行動パターンであるといってよい．よって本稿では，多くの高齢女性が集まるとげぬき地蔵尊及びその周辺地域を「盛り場・巣鴨」として調査対象地域とする（第1図）．

この地域の核となるのは曹洞宗万頂山高岩寺（とげぬき地蔵尊）である．高岩寺は1596（慶長元）年神田明神同朋町（現・千代田区外神田2丁目）に開創された後，下谷上車坂町（現・台東区上野7丁目）に移転され，1891（明治24）年に区画整理により北豊島郡巣鴨町（現・豊島区巣鴨）に移転され現在に至っている．また高岩寺の縁起については『高岩寺地蔵尊縁起霊験記』によると二つの具体的な霊験が記されている[17]．一つは，小石川の田付又四郎の妻が怨霊にとりつかれ夢の中で授けられた印像で作った一万体の印影の

おかげで病気が治ったというものであり，1728（享保13）年7月17日に小石川田付又四郎の自筆で当山八世密厳寂妙住職に献納され現在まで厳重に保管されている．二つは，1751（聖徳4）年毛利家の御殿女中があやまって飲み込んだ針を御影のお陰で吐き出すことが出来たというものである．こうした話が当時の江戸市中に広まり「はやり信仰」[18]の一つとして流布された．よって巣鴨に移転される以前の江戸時代から高岩寺はとげぬき地蔵尊という名で崇められ，多くの人々の信仰を集めていたことになる．現在，高岩寺には東京都内からだけではなく関東近県から，またより遠方から参詣客が連日訪れており大いに賑わっている．参拝客は「御影」といわれるお札を体の悪い



第1図　対象地域

個所に擦り付けてから飲むと病気が治る，または高岩寺境内にある「洗い観音」[19]と呼ばれる観音像を洗うと病気が治るという言い伝えをどこからともなく見聞きし，自身や肉親・知人の健康や家内安全の祈願を目的として高岩寺に来る場合が多い．

高岩寺は旧中山道である地蔵通りに面しており，地蔵通りの両側には商店が建ち並び巣鴨地蔵通り商店街を形成している．2000年現在においてその商店数は347店，従業員数2,223人，年間販売額1,040億9,200万円であり，池袋駅周辺の広域商店街を除けば豊島区最大の商店数と規模をもつ[20]．1986年からの年間販売額の推移をみると，バブル崩壊後の1991年から94年にかけて豊島区全体の売上は減少しているのに対し，巣鴨地蔵通り商店街の売上は一貫して増加しているという[21]．また高岩寺や商店街の一帯は平日には1～3万人，月3回行われる縁日[22]には6万人の人々が訪れる盛り場である[23]．

2．方法

研究方法として聞き取り調査を行った．具体的には，とげぬき地蔵尊境内のベンチや広場，または巣鴨郵便局前の休憩所で休んでいる高齢女性を中心とする人々約40人へのインタビューである．一人あたりの聞き取りに要した時間は10分から3時間程度である．居住地，年齢，巣鴨に来街するようになったきっかけなど簡単な質問以外は自由に語ってもらった．調査期間は2001年2月から同年11月にかけて行った．また9月14日の縁日にはJR巣鴨駅にて面接式の聞き取り調査をした．面接式の聞き取り調査では，年齢，居住地，巣鴨に来街するようになったきっかけ，巣鴨の魅力，巣鴨に来街するようになってどのくらい経つのかを聞き取りした．一人あたりの聞き取りに要した時間は15分から30分程度である．また，聞き取り調査と同時期に盛り場での参与観察を行った．なお本稿では，次章の語り手の発言内容は筆者が再構成した．またインタビューをした状況や語り手の属性をできる限り付記した．

以下，まず第Ⅲ章では現地調査から得られた高齢女性の「場所の経験」について記述する．そこから，彼女らが盛り場・巣鴨へ付与している意味が読み取れると考える．第Ⅳ章では，第Ⅲ章で示した「場所の経験」を分析する．それにより，「経験」を媒介とした場所と人との結び付きや盛り場に集まる高齢女性という集団内で共有されている意識・価値観が明らかとなる．第Ⅴ章では以上のまとめと今後の課題を述べて結びとしたい．

Ⅲ　高齢女性の場所の経験

1．「奇跡的な」体験

1）病気の治癒

「（「巣鴨に来るようになったきっかけは何ですか」という質問に対し）若い頃，二十歳ぐらいの時に頭痛がひどかった．何が原因かわからないが，何かしようとしてもすぐ頭が痛くなった．いろいろな病院で調べてもらったが，どこに行っても治らなかった．もうどうしようかと思って，お地蔵様にお願いした．そうしたら治った．それからお地蔵様に来るようになった．」（91歳，平日，とげぬき地蔵尊内のベンチで休憩をとりながら）この女性は巣鴨の地蔵尊に参詣し偏頭痛が治ったことがきっかけとなり，以来現在まで月一度の参詣を欠かさないと言う．「お地蔵様のおかげで」今まで大病を患ったことがない．

「3年前に大腸炎になった．病院で内視鏡検査したら15センチも炎症おこしていると言われた．もう，びっくり．…それで，ここにお参りに来た．そうしたら，すっかり治った．それから来るようになった．」（71歳，荒川区在住，縁日，とげぬき地蔵尊内のベンチで休憩をとりながら）この女性は自身が大腸炎という病気になったことから必死の思いでとげぬき地蔵尊に参詣した．またその結果病気が治ったことがきっかけとなり，多い時で月三度はお礼参りに訪れるようになった．友達と来るよりも一人のほうが気が楽だと話すこの女性は，「シルバーパス」[24]を使って都バスと都電を使い訪れる．現在，巣鴨に集まる高齢者はこのパスを利用しての来街が多い．

「この前庭で草むしりをしていたら，転んだ．

脇をひどく打った．…御影を（患部に）セロテープで貼って寝たら治った．その後また脇が痛くなって，今度は息子に言って医者に連れてってもらった．レントゲンとか撮ったが異常なかった．ちょっとした肉離れだった．お地蔵様のおかげで治ったんだなぁって思った．」（84歳，港区白金在住，平日，とげぬき地蔵尊内のベンチで休憩を取りながら）夫に先立たれ現在息子と二人暮しをしているこの女性は，群馬県前橋市で生まれ育ち25歳の時東京に上京してきて以来40年以上とげぬき地蔵尊に通い続けている．彼女は「お地蔵様のおかげで元気でいられる」と語り，宗教は嫌いだが月三度の縁日には必ずお参りに来る．「病院に行くよりもここに来たほうが病気が治る」そうであり「お地蔵様にお参りすると気が休まる」としきりに話す．

2）不意の出来事

「足の痛み止めの薬を毎晩飲むのだが，ある日薬の副作用で手や足の裏に湿疹ができた．痒くて真っ赤になった．このまま体中に広がったらどうしようかと思った．このままだったら救急車を呼ぶしかないと思った．一人暮らしなのですごく不安になった．…お地蔵様のお札を細かくちぎって飲んで必死にお願いした．そうしたら，すぐに治った．有り難いなって思った．」（70代，西武池袋線ひばりが丘駅近辺在住，平日，とげぬき地蔵尊内のベンチで休憩をとりながら）足が悪く手術も経験したことがあるこの女性は，夫を亡くし子供とも別居しており現在一人暮らしをしている．足が不自由であるこの女性は，「お地蔵様にお願いすると胸がスーっとする」と話すように，月二度は必ず参詣に訪れる．また彼女は上述のような体験の他に，何の約束もしてないのに偶然別々に暮らしている姉妹と巣鴨で遭遇したことがあり，そのことも「お地蔵様のおかげ」だと語った．

「以前，作業中に居眠りをしてて，もう少しで機械に手が挟まれそうになった．その時，誰かが手をフワっと上に上げてくれたことがあった．きっと，地蔵様が助けてくれたに違いない，と思った．」（72歳，東京都福生市在住，縁日，JR巣鴨駅での聞き取り）5年程前に手が痛くなり友達に勧められてとげぬき地蔵尊に参詣するようになったこの女性は自宅で製造業を営んでおり，電車を乗り継いで一時間半かけて巣鴨に訪れる．彼女は「とげぬき地蔵にお願いすると何でも叶う．今までに何度も助けてもらった」と話す．例えば参詣した5日以内には必ず仕事が入ると言う．こうした体験が積み重なり，現在では地蔵尊を熱心に信じるようになった．月一度縁日に必ず参詣に訪れる．

「出産で入院してた時，お地蔵様がドアを開けて来てくれた．父親がお地蔵様にいい子が生まれるようにとお願いしていた．そしたらお地蔵様がドアを開けて病院に来てくれた．…その後すぐ子供が生まれた．だからできる限りずっとお参りに来たいと思ってる．ただこう言っても信じない人いっぱいいると思う．でも私はお地蔵様が錫杖を地面について，現れたのを見たから．それからすぐに4日の日に子供が生まれた．だからこれもお地蔵様のおかげだと感謝している．」（80代，千葉県船橋市在住，縁日，とげぬき地蔵尊内の広場で立ち話をしながら）既に夫を亡くし一人暮らしをするこの女性は，40年以上前からとげぬき地蔵尊に参詣に来ている．当時としては28歳での高齢出産であった彼女は，出産の時になかなか子供がお腹の中から出てこなかった．心配した父親がとげぬき地蔵尊に熱心にお願いした．その時上述のような出来事が起こったという．

以上のように，足繁く巣鴨，特にとげぬき地蔵尊に参詣に訪れる高齢女性の中には地蔵尊にまつわる何らかの「奇跡的な」体験を持っており，それがきっかけとなって，より信仰心を強め熱心に参詣に訪れるようになったという例があることがわかった．またこの他にも，傷口に「御影」を貼ったら膿が出てすぐに完治したこと，「御影」を飲んだことによりおできが取れたり喉に刺さった魚の骨が取れたりしたこと，とげぬき地蔵尊に熱心に参詣したことで心臓病で20歳まで生きることができないと言われていた孫が今は成人し立派な働き手になったこと，医者に助からないと見

放された息子がとげぬき地蔵尊に参詣したことにより命を救われたことなど，地蔵尊にまつわる数々の「奇跡的な」体験を聞くことができた．

2.「暇つぶし」と散歩

「(「健康の祈願にここに来るのですか」という質問に対し）そんなことない．退屈しのぎに，小さい子にいろいろ見せるために巣鴨に来た．年寄りはもう大した用もないし，暇だから．子供だって小さい子がいるわけではないし．」(80歳，千葉市幕張在住，平日，とげぬき地蔵尊内のベンチで休憩をとりながら)「(「よく来るのですか」という質問に対し）しょっちゅう来る．かたがたお散歩で，かたがたお参り．」(80歳，北区王子在住，平日，とげぬき地蔵尊内のベンチで休憩を取りながら）この女性達が話すように，参詣の一方で半ば「退屈しのぎ」や「暇つぶし」で巣鴨に来る人々は多い．彼女らは特に体のどこが悪いというわけではないが，自身や家族の健康の祈願，足腰を鍛えるために訪れる．

「(「よくお参りに来るのですか」という質問に対し）毎日お参りに来る．こうやって健康で歩いて来られるのはお地蔵様のおかげ．もう，ここに来るのは日課みたいなもの．なんだか一日に一回ここに来ないと，気持ちが悪い．」(80歳，板橋区在住，平日，とげぬき地蔵尊内のベンチで休憩をとりながら）都営三田線で毎日参詣に訪れるこの女性は，十年ほど前から巣鴨に通うようになった．とげぬき地蔵尊境内の清掃婦とも顔馴染みであり，巣鴨界隈についてかなり詳しい．「私はもう，家のことは後の人に任せてあるから，家に居ても仕方ない」と話す．

「私は足が悪い．だから主人もお地蔵様に行く時は車を呼んでくれる．毎月4日は必ずお参りに来てる．自分の足でここまで来られるうちはお参りに来たいと思っている．今は自分の足でお参りに来られるから，ありがたいと思っている．」(78歳，練馬区在住，縁日，とげぬき地蔵尊内のベンチで休憩をとりながら）この女性の発言にみられるように，高齢による身体機能の低下の中でも特に足腰の機能の低下は，高齢者にとって最も切実で身に迫る問題であるようだ．「歩けなくなること」や「腰が立たなくなること」は，「寝たきり」になる前段階であるといえる．「寝たきり」になれば周りの者に迷惑を掛け，また更なる身体機能の低下にもつながる．巣鴨に集まる高齢女性にとっては「自分の足で歩いて」巣鴨までお参りに来ることを一つの目的とした人が多く，皆口を揃えて「自分の足で歩いてこられるうちはお参りに来たい」と話す．

3.「語り合うこと」

「家に一人でいても誰とも話さない．ここに来ると話ができる．話しかけてくる．」(70代，平日，とげぬき地蔵尊内のベンチで昼食をとりながら)「今までずっと家にいたが，やっぱり家にいると駄目．ここに来るといろんな人がいるって思う．苦労してるのは自分だけじゃないって励まされる．みんないろいろ悩みを抱えてるんだなぁって思う．…あと，一人で来ても誰かが声をかけてくれるのが嬉しい．いろんな人と話すのってやっぱり大事．気持ちが休まる．」(70代，埼玉県在住，縁日，とげぬき地蔵尊内のベンチで休憩をとりながら）この女性達が巣鴨に来る主な目的は参詣ではなく，ここに集まってくる様々な人と語り合うことにあるようだ．お互いの苦労話を語り合い共感し合うことで，自分自身の行き場のない思いや気持ちを発散し心を休めていると考えられる．

「前ここのベンチに座っていたら，たまたま隣に座った人がいた．身の上話をして，それで気が合って一緒に巣鴨園[25]でお昼を食べた．こんないい，気の合う人に会えたとお互い喜んで，またいつか会えたらいいですねと言って別れた．」(70代，西武池袋線ひばりが丘駅近辺在住，平日，とげぬき地蔵尊内のベンチで休憩をとりながら)「(「巣鴨の魅力は何ですか」という質問に対し）一人で来ても寂しくないところ．誰かが声をかけてくれる．若い人ともおしゃべりできるし、一人でご飯食べてても誰かがしゃべりかけてくれる．」(73歳，神奈川県座間市在住，縁日，JR巣鴨駅での聞き取りで）巣鴨で知り合いそのまま意

気投合しお互いの身の上話を語り合うことや一緒にご飯を食べることは，巣鴨においてはさして珍しいことではない．しかし前者の女性が語るように，お互いが旧知の間柄のように身の上話を語り合っても次に会う約束はせずに，「また会えたらいいね」とだけ言い合って別れるのが巣鴨の“通例”ともいえる[26]．

4．娯楽

「今デパート行っても若い人向きになってきているし，ここでは食べ物とか着る物とかも着心地を大事にしてるから，私達の年代になると懐かしい．…いま年寄りが，ヨッタヨッタヨッタヨッタ歩ける街が無い．ここは値段も手頃で何でもあるし歩きやすいし，何かというと年寄りはここに来るのではないか…東京にこんな年寄りを受け入れてくれる街なんてないのではないか．私は他知らないけど，ここに来たら気が楽で気が楽で．出掛けるのに鏡も何にもいらない．暑いから帽子かぶって，歩くから運動靴はいて…ほんと気が楽．どんな格好したって平気．」（80代，巣鴨在住，平日，巣鴨郵便局前のベンチで筆者と中年女性と3人での雑談の中で）この女性は一昨年に日本橋から巣鴨に引っ越してきた．日本橋では周りの人々が「おしゃれをして颯爽と歩いて」おり，「気後れ」していたが，巣鴨に来てからは「気が楽」だと盛んに話す．また，巣鴨は東京の他の盛り場と比べて，飾らずに自分のペースでそぞろ歩きのできる居心地の良い場所であると感じていることがわかる．それは以下の女性の発言からもうかがえる．

「（「巣鴨以外にどのようなところに遊びに行くのですか」という質問に対し）浅草とかよく行く．でも，巣鴨のほうがいい．庶民的で，モノも安い．ついついみんなにお土産買って帰る．いつもここに来ると買物袋で両手いっぱい．」（70代，葛飾区在住，平日，筆者と何人かの高齢女性との会話の中で）巣鴨や浅草の共通点は「参詣」と「娯楽」が一体となっていることであろう．また何人かの高齢女性が巣鴨以外に頻繁に遊びに行く場所として同じような所[27]をあげたことから，東京という都市空間において高齢者，この場合は高齢女性の遊ぶ場所がほぼ限定されているとも考えられる．

「この商店街は安い．消費税を取らないんだもの．私の着てる服，全部巣鴨で買った．」（78歳，練馬区在住，縁日，とげぬき地蔵尊境内のベンチで休憩をとりながら）「（「巣鴨に来る目的は何ですか」という質問に対し）巣鴨に来る一番の理由は買い物．こんなこと大きな声では言えないが，他ではなかなか年寄り向けの下着とか売ってない．ここでは，気軽に安く買える．」（70代，埼玉県さいたま市在住，縁日，JR巣鴨駅での聞き取りで）「（「巣鴨の魅力は何ですか」という質問に対し）行きつけの店がある．行くと必ず「おかえり」と言ってくれるのが嬉しい．」（72歳，東京都福生市在住，縁日，JR巣鴨駅での聞き取りで）消費税をとらないこと，他では容易に手に入れることができない高齢女性用の衣類を売っていること，品物が安価なこと，店員の親心的な接待など他の盛り場や店では味わうことができない巣鴨だけの「魅力」が彼女らの心をつかんでいることがわかる．巣鴨に定期的に頻繁に訪れる高齢女性は，地蔵通り商店街に必ず自分だけの「行きつけ」の店があり，そこには自分だけが発掘した「お気に入りのもの」があることが多い．その「お気に入り」は前述の語りの中で見られるように，店員であったり食べ物であったり雑貨であったりする．そういったものを友達や家族に勧めたり自慢したりすることが，彼女らの巣鴨での「楽しみ方」の一つなのである[28]．

「私はもう40年以上もここに来ている．年寄りにとったらこんなにいいとこはない．遊べるし．いくら年金もらってぶらぶら遊んでもいいと言われても，近所をぶらぶらするわけにはいかない．近所の人たちの目がある．でも，巣鴨のお地蔵様に行くと言えば，ああそうって言われるだけ．年中どこかに出掛けると思われるのはいやだが，お地蔵様なら仕方ないって…．」（84歳，港区白金在住，平日，とげぬき地蔵尊内のベンチで休憩をとりながら）この女性は自由に使うことができる年金[29]を手に入れても「近所の目」が気になり，

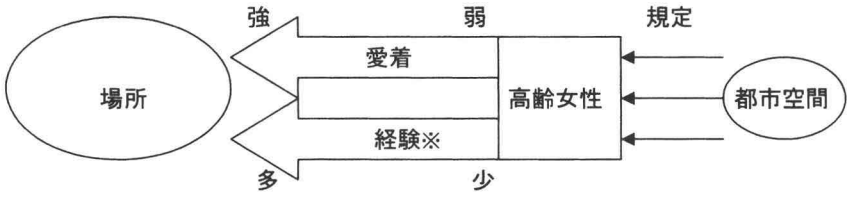
なかなか思うようにあちらこちらに盛んに遊びに行くことはできないようだ．しかし巣鴨の「お地蔵様」にお参りに行くと言えば，周囲の誰もが納得し了解してしまう．その背景には，巣鴨が“年寄りが集まる場所”であるという一般的なイメージがある程度定着していることなどがあるように思われる．

Ⅳ　考察

前章では巣鴨に集まる高齢女性の場所の経験を記した．本章では，それらから読み取ることができる彼女らの場所への愛着について詳しく検証していきたい．

第一に指摘できるのは，前章第1節にあるようにとげぬき地蔵尊にまつわる何らかの経験が契機となり地蔵尊への信仰心を強めたこと，そしてそれが巣鴨へ足を向かわせる原動力になっていることである．とげぬき地蔵尊にまつわる数々の奇跡的ともいえる体験は，たとえそれが偶然の産物であり何の根拠もない出来事であるとしても，「巣鴨のお地蔵様のおかげだ」という結論のもと人々の関心を掻き立てる噂話・世間話として口々に伝えられ，とげぬき地蔵尊へのより一層の信仰心へと変わっていく．こうした「奇跡的な」体験を積み重ねたと思われる巣鴨に集まる高齢女性にとって「巣鴨のお地蔵様」こそ，今・現在の自分の心と体を癒してくれるかけがえのない信仰対象であると言える．またこうした地蔵信仰は女性と分かち難く結び付いている．「仏教の仏菩薩のなかで，地蔵の尊像ほど日本人に親しまれているものは多くはなかろう」[30]と言われているように，地蔵尊は一般的に日本人の生活や意識に深く根ざしている身近な存在であった．地蔵信仰は日本の道祖神信仰と結びつき，村境や辻，巷などに地蔵尊が置かれたことや，中世以来人々が地蔵に対してほとんど身勝手なほどに救済の要求を寄せたことなどにより，幅広く民衆の間に信奉されていった[31]．また江戸時代になると，安産地蔵，子安地蔵，腹帯地蔵，世継ぎ地蔵，子持ち地蔵，子育て地蔵，孕み地蔵といったように，地蔵尊は幼児の守護や胎児の安産を祈願するもののように考えられ子供と縁の深いものとなっていった．それと同時に，出産の無事や生まれた子供の無事成長を祈るために，女性の間で地蔵信仰が深く浸透していったと考えられる．それは地蔵講の多くが女性により構成されていることからもわかる．とげぬき地蔵尊こと高岩寺のご本尊の正式名称は「延命地蔵菩薩」であるが，境内には子育て地蔵も鎮座している．このことから，自身の御利益や子供の健やかな成長を願って参詣に訪れる女性は多いと考えられる．巣鴨に多くの女性が集まる要因の一つとして，こうした地蔵尊の持つ庶民性と女性との親和的な関係がその基底にあることは重要である．

第二に，前章第3節に見られるように彼女らが「自分自身について語ること」を通じて巣鴨への愛着を強めていることが指摘できる．巣鴨に集まる高齢女性は何の衒いもなく自分自身の身の上話を見知らぬ人々と語り合うことが多い．とりとめのない話をある時は深刻に，ある時は実にあっけらかんとあけすけに互いに語り合いうなずき合うことにより心の平安を取り戻しているかのようである．そこでお互いが歩んできた人生の様々な出来事に対して共感し，苦しみや喜びを共有しているのである．彼女らの一人ひとりの人生は多様性に富んでいたとしても，人生において経験した出来事はおおよそ似通っている．それは例えば，幼い頃の苦労，結婚，出産・育児，姑からのいじめ，嫁との折り合い，自身の病気，子供に関する悩み，配偶者の死，そして戦争である．その時代に生きている人々が辿ったであろうこうした経験は，彼女らに独特の連帯感を持たせている．巣鴨に集まる高齢女性を例に取ると，「戦争」という固有の社会的記憶[32]と，巣鴨での場所の経験や彼女らの人生経験といった個人的記憶がその集団内において共有されていると考えられる．つまり巣鴨は高齢女性にとっての「記憶の場所」あるいは「記憶を共有し合う場所」でもあると言える[33]．しかしここで重要なのは，巣鴨に集まる高齢女性の誰もが自分自身に関する事を語りたがるわけではない，ということである．自分の人生や経験を



※経験とは本稿でいう「場所の経験」を指す

第2図　高齢女性と場所との関係

語ることは，ともすれば自分自身の苦労話やけして幸運とは言えない出来事を他人に聞かせることになる．そういった話を見ず知らずの他人に聞かせることを快しとする志向性を持っている高齢女性が，より強く場所への愛着を持っている．さらにこうした志向性は，巣鴨においていかなる経験をしたのかというその経験の量と質にも拠っている．自らの感受性を刺激した巣鴨での人々との関わり合いや語り合いは，巣鴨への愛着へとつながり，そういった経験が積み重ねられることにより，場所の「内側」にいることを確認していく．つまり，高齢女性の巣鴨への愛着は，その場所との実質的な距離はそれほど関係がなく[34]，そこでいかなる体験をし，それがどれほど自らの感情を突き動かしたのかという心理的な密接度が問題なのである．

第三に，前章第4節に見られるように，地蔵通り商店街やマスコミによって流布される巣鴨の場所イメージといった特性が高齢女性の「場所の経験」に大きく影響している．商店街の店員との触れ合いやそこで売られている高齢女性向けの商品は他の場所にはない巣鴨だけの特徴であり，彼女らにとって巣鴨がかけがえのない場所であるという思いを強める要因となっている．また巣鴨が高齢女性が集まる場所，いわゆる「おばあちゃんの原宿」というイメージが社会的に広く認知されていること[35]が，高齢女性が気軽に巣鴨に出掛けていくことができる雰囲気を作り上げていると言ってもよい．しかしこうしたイメージの流布は，巣鴨が一般の盛り場とは一線を画す高齢女性ばかりが集まるある種特殊な場所であるという世間からのまなざしの表れとも考えられる．

さらに重要なのは，東京という都市空間において高齢女性が堂々と娯楽に興じることができる場所が限定されているということである．他の盛り場ではどこか肩身が狭く違和感を感じている彼女らが，巣鴨では自分の居場所を見出すことができる．足が悪いために盛り場で闊歩できなくても，着飾った格好をしていなくても，年金で好きな物を買うことができ，また「暇つぶし」のために気楽に訪れることができる場所が巣鴨なのである．

V　むすび

本稿では，盛り場・巣鴨に集まる高齢女性の「場所の経験」から「人が集まる場所」について検討してきた．結果，人と場所との結び付きには「経験」が重要なファクターとなっていることがわかった．盛り場に集まる集団内で共有さている価値観や意識は「経験」を通じて形成され，強化される．本稿の事例においては，とげぬき地蔵尊の御利益を受けたと感じるような当人にとっては奇跡的ともいえる体験をしたこと，盛り場での人々の触れ合いや自分自身の身の上話を「語り合う」ことといった直接経験により，集団内において共通のコードが作り上げられそれを共有することで巣鴨への愛着を強めていると言える．それは，本来は非日常的空間である盛り場を，濃密な経験を積み重ねそこに集まる人々と価値観を共有することによって日常的空間へと組み替えていく営みに他ならない．さらに高齢女性が巣鴨へと足を向けるのは彼女らの場所への愛着だけに起因す

るのではなく，東京という都市空間において高齢女性の娯楽の場が限定されているということに規定されている（第2図）．

なお，本稿で対象とした高齢女性は「無作為」に選定されたわけではない．筆者が対象となる高齢女性を「選んで」聞き取りをした．よって，本稿で得た高齢女性からの語りは一般性のあるものとは必ずしも断言できず，また筆者が語り手を選定している時点で一つの調査バイアスがかけられたことは否めない．巣鴨に集まる高齢女性のより具体的な実相に迫るためには，様々な属性や目的をもった高齢女性を無作為に選定し，さらに詳細な聞き取りをする必要がある．また，本稿では現代を生きる高齢女性を取り巻く社会構造について深く考察しなかった．彼女らには共有する独自のジェンダー経験といえるものがあり，それはけして固定的・普遍的なものではなく時間的・空間的に規定されている側面がある以上，高齢女性の主観や人生経験に迫るライフヒストリー的アプローチと制度論的アプローチ双方からの検討が必要である[36]．

以上は筆者の今後の研究課題である．

謝辞

本稿を作成するにあたり多くの方々からご協力いただいた．まず筆者に数々の興味深い話を聞かせてくれた巣鴨の「おばあちゃん」達に感謝申し上げたい．また現地調査では藤ヶ谷政明さんをはじめとする巣鴨在住の方々や商店街の方々，資料収集では豊島区郷土資料館の横山恵美さん，豊島新聞社の篠原正直さんに大変お世話になった．法政大学地理学教室の先生方，先輩・友人には多くのご助言をいただいた．この場を借りて以上の皆様に心からお礼を言いたいと思う．

本稿は2001年度法政大学大学院に提出した修士論文の一部である．

注記

1）カステル，メラー，フィッシャー（奥田道大・広田康生訳）（1983）：都市の理論のために．多賀出版（Manuel Castells, Julia R. Mellor and Claude S. Fischer, Urban Sociology in Urbanized Society. 1977.）

2）ジョージ・ジンメル（居安正訳）（1998）：現代社会学体系1　ジンメル　社会文化論・宗教社会学．青木書店．（Über soziale Differenzierung. Soziogische und psychologishe Unterschungen. 1890.）

3）山野正彦（1985）：人文主義地理学．　坂本英夫・浜谷正人編『最近の地理学』．大明堂．238－245．

4）トゥアン・イーフー（山本浩訳）（1988）：空間の経験　身体から都市へ．筑摩書房．（Yi-Fu Tuan, Space and Place : The spective of experience. Univ. of Minnesota Press. 1977.）

5），エドワード・レルフ（高野岳彦・阿部隆・石山美也子訳）（1991）：場所の現象学－没場所性を越えて．筑摩書房．274 p.　（Relph, E., Place and Placelessness. London : Pion. 1976.）

6）1985（昭和60）年に読売新聞の記者が「おばあちゃんの原宿」というフレーズとともに巣鴨を取り上げてから巣鴨という街を語る際の代名詞となった．

7）商業界（2000）：「おばあちゃんの原宿」にみなぎる活気が遠来客を引き寄せる．　商業界，10月号，47－50．

8）川添　登編（1988）：おばあちゃんの原宿　巣鴨とげぬき地蔵の考現学．平凡社．195 p.

9）川添　登（1991）：とげぬき地蔵（万頂山高岩寺）の変容と発展－「おばあちゃんの原宿」は，どのようにしてつくられたか－．　国立民俗学博物館研究報告，33，43－74．

10）倉沢　進編（1993）：大都市高齢者と盛り場　とげぬき地蔵をつくる人びと．日本評論社．190 p.

11）竹内　宏（2001）：とげぬき地蔵経済学　購買意欲を刺激するシニアの心の掴み方．メディアファクトリー．181 p.

12）2001年現在，高齢者人口の約58%が女性であり高齢社会が女性化傾向にある．高齢社会の女性化に付随して高齢女性が抱える独自の問題に着目した研究が行われるようになってきた．例えば彼女らの抱える経済的，身体的，精神的諸問題と彼女らを取り巻く社会保障制度に関する研究（若林，1982），就労に関する研究（月田，1991），高齢女性のライフコース分析から家族形態の変化を探る研究（菊地，1994・1999），高齢女性の生活に関する研究（野邊，2000 a・b），エイジズムとセクシズムに関する研究（樋口編，1992）などがみられる．こうした研究に通底している問題意識は，従来の「家」制度や社会通念によって拘束・抑圧されてきた女性が高齢者になった時に直面する経済的・精神的自立といった問題にいかに対応しどう克服するかというものである．（①若林敬子（1982）：高齢女性問題への接近－人口問題

と社会福祉との接点－．人口問題研究，163,44－67．②月田みづえ（1991）：高年齢女性の就労に関する諸問題．昭和女子大学女性文化研究所紀要，8,95－112．③菊地真弓（1994）：高齢女性のライフコースからみた家族類型．ソシオロジクス，16,10－18．④野邊政雄（2000 a）：高梁市の高原部に住む高齢女性の暮らし．岡山大学教育学部研究集録，113,69－85．⑤野邊政雄（2000 b）：高梁市の高原部に住む高齢女性の生活．岡山大学教育学部研究集録，114,47－57．⑥樋口恵子編（1992）：エイジズム：おばあさんの逆襲．学陽書房．275 p.）

13）①杉山和明（1999）：社会空間としての夜の盛り場－富山市「駅前」地区を事例として－．人文地理，51(4)，68－81．②山口晋（2002）：大阪・ミナミにおけるストリート・パフォーマーとストリート・アーティスト．人文地理，54(2)，65－81．

14）吉見俊哉（1987）：盛り場．　見田宗介・栗原彬・田中義久：社会学事典．弘文堂．332－333．

15）豊島区（2000）：豊島区都市計画マスタープラン　都市計画に関する基本的な方針．豊島区．148 p.

16）前掲 8）

17）巣鴨百選編集部編（1995）：巣鴨百選．8 号．巣鴨百選会

18）「はやり信仰」とは，ある奇跡によって霊験が付与され，急激に流行した神仏のことを指す．とくに江戸時代の後期になってこういった現象が各所で見られるようになったと言われている．

19）「洗い観音」の由緒は不明．「法華宗系で「浄行さま」という「あらい仏」信仰の一種．自分が患っているところと同じ部分をなでて快復を祈る「なで仏」信仰と，身体のけがれを水で清める「みそぎ」の信仰が結びついた民間信仰であると考えられる．」（新倉善之編（1998）：江戸東京　はやり信仰事典．北辰堂．326 p.）

20）東京都（2000）：東京の商業集積地域．東京都総務局統計部商工統計課．454－456．

21）国民金融公庫（1997）：「おばあちゃんの原宿（巣鴨地蔵通り）」商店街奮闘記－「健康」と「懐かしさ」をテーマに集客する街－．調査月報，433,28－33．

22）高岩寺が巣鴨に移転された当時住職についた巨海道雄が参詣客を集めるために毎月 4 の付く日（4・14・24 日）に縁日を行うこととした．

23）巣鴨地蔵通り商店街振興会（発行年不詳）：巣鴨地蔵通り商店街について．巣鴨地蔵通り商店街振興組合．20 p.

24）1980（昭和 55）年に東京都が発券したもので，70 歳以上の高齢者に対し都営バス，都営地下鉄，都内の民営バスを自由に乗車することができる．

25）地蔵通り商店街にある飲食店．

26）こうした巣鴨だけで成り立つともいえる淡泊な人間関係は，筆者自身も参与観察の中で幾度か体験した．

27）浅草や柴又である．

28）たとえば次のような証言があった．「巣鴨に来た時は，「萬成堂」（薬局）には必ず寄る．「アルプスシューズ」（靴屋）もお気に入り．いい靴が置いてある．」（70 代，練馬区在住，縁日），「「昆布ゼリー」がおいしくてよく買う．友達の間でも大評判．旅行の時は必ず持って行く．」（73 歳，座間市在住，縁日）

29）1961（昭和 56）年に国民年金制度が確立され，いわゆる国民皆年金体制ができ，すべての国民に対する保険と年金が整った．さらに 1973（昭和 48）年には，老人医療費無料化政策がとられ，老人の医療費は無料となった．こうした高齢者を取り巻く年金・保険制度の整備により，高齢者の老後の生活が保障されるようになった．（竹本善次（2001）：社会保障入門　何が変わったか・これからどうなるか．講談社．248 p.）

30）桜井徳太郎（1983）：地蔵信仰の研究成果と課題．桜井徳太郎編：地蔵信仰．雄山閣．283－291．

31）和歌森太郎（1983）：地蔵信仰について．桜井徳太郎編：地蔵信仰．雄山閣，45－71．

32）彼女らにとって「戦争」が他の世代と比べ特別な意味を持っているということは，ほぼ毎日地蔵通り商店街に座り物乞いをしている「傷兵（戦傷者）」の存在からも推し量ることができる．

33）アルヴァックス（1989）は，階級や社会集団を複雑に分化させた近代都市生活において，各集団が共有しているその集団に固有の記憶とその集団にのみ属する時間の表象を「集合的記憶」と呼んだ．アルヴァックスによると，濃密な接触と情緒的繋がりによって結ばれた集団は，共通の体験に基づいた生き生きと躍動する記憶を持っている．（モーリス・アルヴァックス著，小関藤一郎訳（1989）：集合的記憶．行路社．264 p.　Maurice Halbwachs, La Mémorie. Colective. P. U. F.. 1950.）

34）巣鴨を地元とする人々への聞き取りでは，とげぬき地蔵尊という存在はあまりにも身近にあり，いつでも行くことができる場所であるため，特別な感情が涌かないし改めて行ってみたいとも思わない，という証言があった．

35）『大宅壮一文庫　雑誌記事索引目録』によると

1988年から2002年まで雑誌において巣鴨が取り上げられたのは19件である．また巣鴨には縁日以外でもテレビクルーが1組ぐらい来る，と言われるようにマスコミによる取材が多い．

36）高齢女性に関する地理学的研究課題を提起したものとして以下の文献が挙げられる．Haper, S. and G. Laws（1995）：Rethinking the geography of ageing. Progress of Human Geography, 19, 199－221.